

浄

monthly
JODO

土

April 2003

4



法然上人鑽仰会

昭和 10 年 5 月

創刊号

この号は在庫がありません。
お持ちの方でお譲り頂けるな
らば連絡頂ければ幸いです。



表紙・扉畫 井上正春

きたれ光の中へ 眞野正順

眞の浄土 椎尾辨匡

法然上人への思慕 岡本かの子

三つの聖樹 翁久充

親子 松浦一

元祖の意味 高瀬承麿

上人傳に關して 佐藤春夫

劔と禪と念仏 結城令聞

信仰相談

中華民國の建設者中山先生 武田泰淳

てんぼうの清作 岡本俊一

趣味講談 子育て吞龍 大谷梅庵

ユーモア 茶房娘エリコ 北林透馬

首編り綺談 往生絵巻 十一谷義三郎

(青柳喜平衡畫)

家庭の衛生 菅原リウ子

随想華 中村辨康・新田

法然上人鑽仰会に就て 佐藤賢順

上人の御うた「月影の歌」諸家評釈

姉崎正治 相馬御風 上田萬年

白鳥雀吾 佐藤春夫 宇野圓空

松浦一 辰野九紫 小笠原長生

曾我家五郎 徳山輝

一枚起請文講義(第一回) 中村辨康

仏弟子中の一女性 芝園輝一

増上寺の百日結集道場

佛教修道院の話



法然上人鑽仰会

寺院紀行

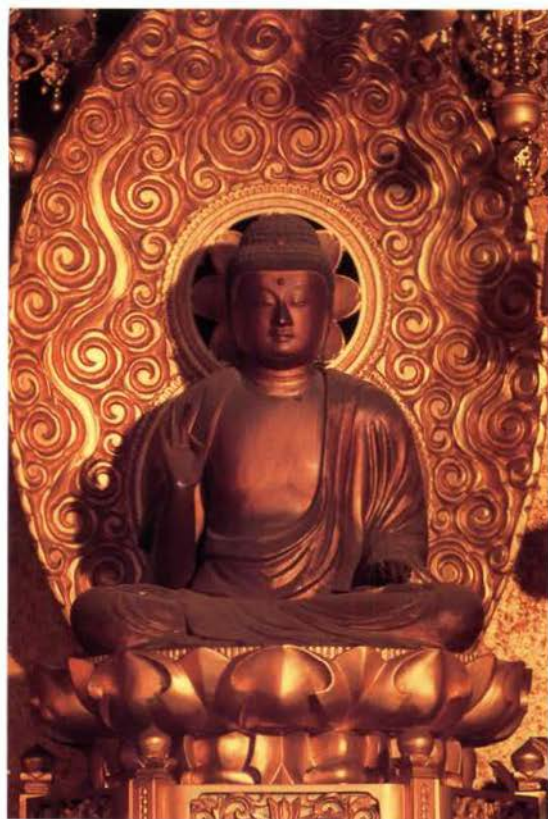
寺に歴史あり
人々に信仰あり
日本の
心の故郷を紀行する

東京・芝

廣度院

浄土宗大本山増上寺参道の三門寄りに建つ廣度院。上は御忌伝達式後での一枚。
右から赤坂浄土寺、阿川正實住職・安紀子（長女）夫妻、唯文副住職、峰島旭雄住職・行子夫妻、大雲寺、西城宗隆住職、千珠子（次女）夫妻とそのご子息、法遵君





本尊阿彌陀如来坐像



かつて真言宗だった名残をいまに残す不動明王像



廣度院内陣

御忌唱導師にあたり、一月に教書伝達式が増上寺で行なわれた。
その大殿での伝達式で成田有恒台下より伝達書を拝受する峰島住職



平成十年に登録有形文
化財に指定された線塀



廣度院第二十五世峰島旭雄住職

廣度院本堂





本堂裏手の墓地は山内に多く見られる昭和初期の特設墓地を改造したもの。なかには山崎家の墓（墓碑銘は頭山満書）などがある

老朽化が激しくなった庫裡は平成10年に建て替えられた。その庫裡では住職が大学で教鞭をとっている頃から始めた勉強会が頻繁に開かれている。若い頃から勉強が大好きという住職、思わずの笑がこぼれる



浄土

2003/4月号 目次

巻頭カラー 寺院紀行 東京・芝 廣度院.....	撮影=タカオカ邦彦	1
巻頭特別インタビュー「小泉淳作」.....	平井泰代子	6
表紙のことば	永井健策	15
寺院紀行 東京・芝 廣度院	真山 剛	16
新連載 会いたい人①渡辺えり子	関 容子	26
響流十方	林田康順	34
新連載 「代替医療」という世界	井上朝雄	38
民話をたずねて	石崎敬子〈絵石川忠夫〉	40
Jフォーラム		47
浄土誌上旬会	選者=増田河郎子	48
俳諧嚙	一回斎放念〈絵陀羅尼禿頭〉	51
編集後記		52



表紙題字=浄土門主 中村康隆 祝下
アートディレクション=近藤十四郎
協力=迦陵頻伽舎

◆巻頭特別インタビュー◆

『絵は人なり』

小泉淳作

絵画の世界が、たえずいくつかの群れをつくって動いているなかで、小泉淳作氏はひとり独創の道を歩んできた。このことが彼を「孤高の画家」といわせるのであろうか。



撮影・飯島幸永

インタビュー・本誌 平井泰代子

孤高の画家小泉淳作氏が三匹の龍を描いた。

鎌倉・建長寺創建七五〇年記念の「雲龍図」と、建仁寺開創八〇〇年記念の「双龍図」である。この東西の名刹の天井画をひとりの作家が描くという「平成の大画業」をなした小泉淳作氏にインタビューをお願いした。

このインタビューのなかで、増上寺光摂殿の天井絵の一枚「泰山木」を小泉淳作氏が描いていたことを知って、不思議な感動をおぼえた。

——大画業の龍を描くことに、大変なご苦労があったと思われますが。

今から約10年前に、建長寺から「法堂の天井に龍を描いてくれないか」と頼まれ創作に掛りましたが、ことはそんなに簡単に運びませんでした。

巨大な画面「雲龍図」（縦10×横12メートル）を描くアトリ工がなかなか見つからず、結局、建長寺の寺務所にある120畳の大広間を借りましたが、法事などがあると大広間を使うことができません。1週間のうち2日位しか制作に取り組むことができず、それも朝に4、5人の助けを借りてパネルを並べ、夕方にきれいに片づけなければならぬのですから大変でした。

建仁寺の龍はさらに大きかったのですが、幸いといいアトリ工がみつかりました。北海道帯広の郊外の中札内村から、移転して廃校になった小学校の体育

館の提供を受けました。また、これら二つの事業は横河電機(株)の文化支援活動(メセナ)の協力を得、実現しました。

——先生は写生を大変大事にされるとお聞きしましたが、「龍」は架空の動物ですね。何を参考にされたのですか。また、先生の「龍」は五本指の「五爪の龍」になっていますが、何か特別の意味があつたのでしょうか。

中国の古来の優れた画家の龍図を参考にしました。中国の南宋時代、龍の名手として名高い画家・陳容が描いた龍が素晴らしく、彼の龍を研究したので偉そうなこと言えないですよ。

建長寺は鎌倉五山のなかでたった一つ法堂がある寺です。京都は七寺の内六寺が龍を描いていましたので、鎌倉の場合はそれに習い真円の中の龍を描きました。逆に、建仁寺は天井から逃げ出すくらいに勢いのある龍を描こうと思いい、二匹の龍を描くことにしました。これは画期的なものと思っています。

中国では、五本指の五爪は皇帝しか使えなかつたので、日本に伝わってきたときは三本指か四本指でした。しかし、ここは日本ですから皇帝に遠慮する必要がないので、五爪にしました。だけど五本指だとしても人間の手に似てしまい非常に描きにくかつたですね。

加山又造も天龍寺の龍は五爪で描いています。

『小泉淳作氏が、墨絵をはじめられたのは60歳ごろと遅く、自己を探求する強靱な精神力は、

墨の濃淡だけで絵を完成させていくことに強く影響しているように思える』

——二つの天井画を描くにあたって用いた画材は、特別なものですか。

縦1.9×2.6メートルのパネルに貼られた紙は、特別に漉いた麻紙と呼ばれるもので、麻の繊維を漉きこんだものです。建仁寺の場合はこのパネルを36枚つなぎ合わせて描きました。

墨は中国でも最上の墨房「程君房」で300年位前のものを使用しました。直径6.5センチ、高さ20センチの円筒形の巨墨です。硯は端溪と並ぶ歙州硯で巨硯です。どれも貴重なものです。

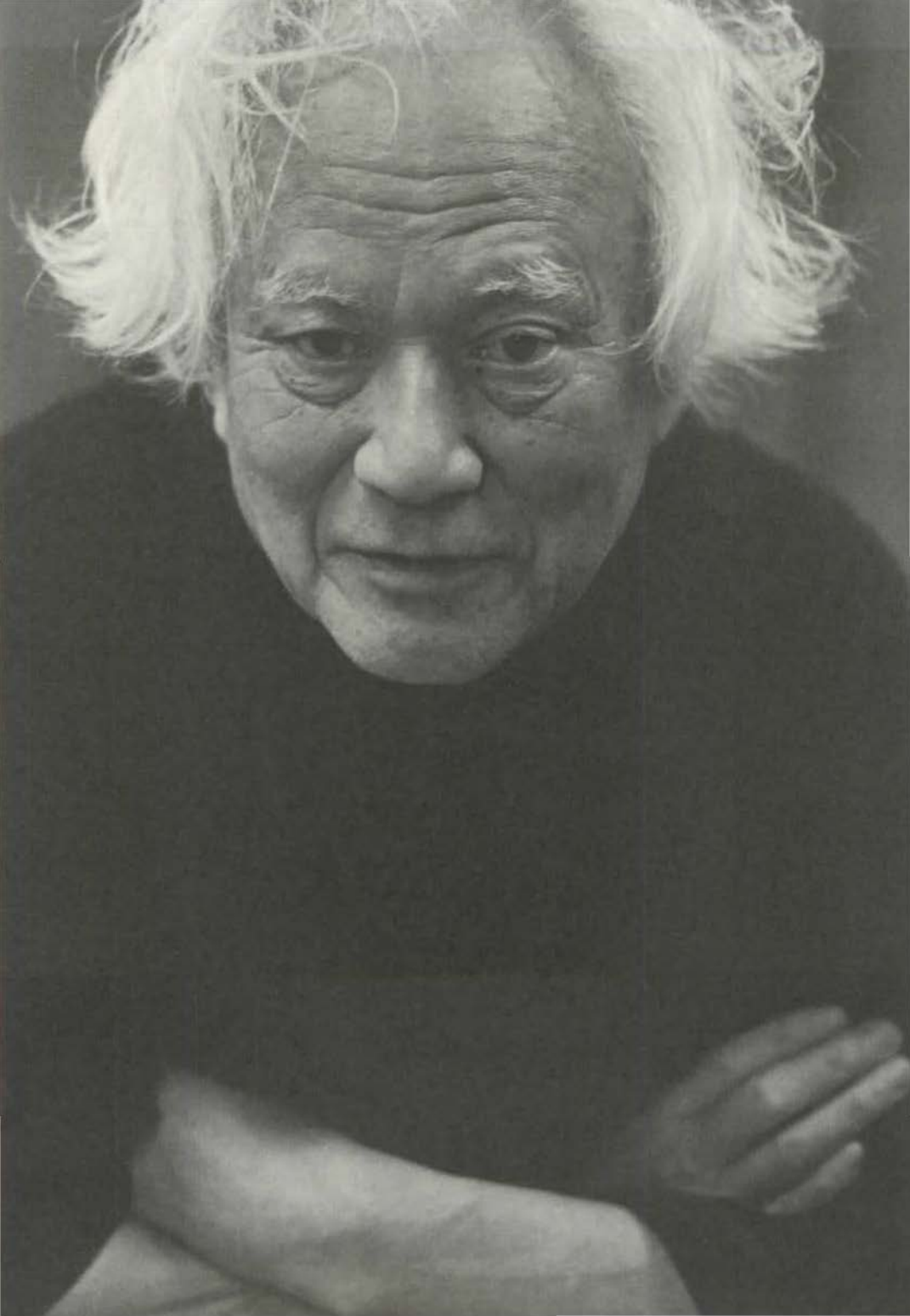
墨は腐りやすいので、その日に使う分だけを磨るのですが、初めはなかなか上手く磨ることができなくて、試行錯誤して墨を斜めにして磨ったら、これが上手くできたんです。やってみないと解らないですね。

巨大な作品を手掛ける場合は、小下図がとっても重要で、これが基本になってきます。今回は1/5の小下図に数ヶ月の時間をかけしつかり描き上げ、あとは建築のように仕上げました。

——故事の「画龍点睛」ではありませんが、普通多くの画家は目を最後に入れると聞きますが、先生は最初に目を描かれたそうですね。

目というより顔から描きました。当たり前のことですよ。一番大事な部分から描かないと、全体の印象が大きく左右されますから。





——長い時間「龍」を描かれたことで何か変わられましたか。また、龍の顔が先生によく似ているように感じられますが……。

5年も6年も龍ばかり描いていたから、僕が似てきたのでしょ（笑）。いい経験をしましたね。お蔭で名が売れました。テレビ・新聞・雑誌で取上げてくれたことで、ファンが増えました。でも、僕にとつては、それよりも前に東京ステーションギャラリーで個展を開いたことが非常に重要だと思っています。こちらが本命なんです。これを観てファンが増えてくれることがね。

——先生の絵はどれも生きる力を感じるのですが、なかでも一九七五年に描かれた「生れ出づる華」は、とても深く霊的なものを感じました。先生にとつて絵を描くということは、どのようなことなのですか。

今の日本画は綺麗なもののしか描かないでしょ。桜とか富士山とか美人画とかね。また、こういう絵が売れるんです。

でも違いますよ。綺麗なものと美しいものとは違います。美しいということには、感動があるでしょ。美しいものを描くのが絵なんです。泥んこの中にも美しさはあるのです。安っぽい綺麗さに、描く人も観る人も誤魔化されてはいけません。僕は描きたいものがあるのではなく、美しいと感じたものを描くんです。野菜でも花でもね。

絵描きが絵を描くのでなく、人が絵を描くんです。そうでなければ芸術とは言えないでしょ。

「生れ出づる華」を描いたときは、まだ絵が売れていない時でした。何度も

何度も描いては消し、消しては描いて、自分が氣に入るまで描いた絵です。

——先生の著作のなかで、「自己探求」という言葉がよく使われていますが、先生の描かれた絵をみていますと、「自己探求」の意味の重さをとても強く感じたのですが。

絵描きだけでなく物書きでも、自分の中にいつでも自分を批判する力がなくては、芸術家になれませんよ。

自分では結構辛いつもりで心に関所を持つているけれど、だんだんその関所自体が甘くなつて、腐つてくるんですよ。その関所を作ることが大変ですね。

科学は、先人の成果の上に、次の人の成果を継ぎ足していけるけれど芸術はそうはいきませんよ。

特に絵描きは、一人、一人が自分で考え、自分で歩くというゼロからの出発をしていかなければならないですから。厳しいものです。

——先生が影響を受けられた人がいらっしやいますか。

影響を受けたというより、人格的に芸術家として尊敬している師は、中川一政ですね。仕事としては、僕は誰の真似もしないで絵を描いているから、誰の影響も受けていません。

——最後に先生は陶芸もされていますが、絵を描くことと陶芸は同じですか。

陶芸のきつかけはいい湯のみが欲しく、いろいろ探しましたか、なかなか氣に入つた湯のみが見つからなくて、それなら自分で作ろうと思つたのが始まりです。近くに富本健吉の弟子がいました、その人に習いました。思いがけず

この陶芸作品が売れて、この時は絵では食べていけなかったので助かりました。轆轤を回している時は、無心になってとても気持ちがいいのですが、これは仕事ではなく気分転換です。絵はそうはいきません。苦しいですね。でも、苦しんで、葛藤して絵を描いた後の爽やかさは、最高ですね。絵を描くことが僕の仕事です。

「僕は俗物ですが、俗人が嫌いです」と語ってくれた小泉淳作氏のこの言葉に、いつも「真」だけを見続け「偽り」をもっとも嫌う姿勢を感じました。先生から「書は見るべし、絵は読むべし」の明言を覚えていただきました。その意味は、絵は表面的には複雑で人を惑わす要素が多いが、その奥にひそむ作家の本質を読み取ることができるかどうかだ。絵を描く人だけでなく、絵を観る側の資質も問われているのかもしれない。

絵を描くことで自己探求されている一人の画家小泉淳作氏に接することができ、多くのことを学ばせていただいたことを感謝します。



告知

4月6日(日)AM9:00~NHK教育テレビ「日曜美術館・小泉淳作の世界」の再放送

5月31日(土)~6月15日(日)9:00~16:00

建長寺法堂の法堂天井画「雲龍図」特別公開 拝観料500円 問合せ先0467-22-0981

小泉淳作プロフィール

1924年 神奈川県鎌倉に生れる。

1943年 慶応義塾大学文学部を中退、東京美術学校日本画に入学する。

1952年 東京美術学校日本画を卒業、山本丘人に師事する。

1977年 第4回山種美術館賞展(山種美術館)に《奥伊豆風景》を推薦出品、優秀賞を受賞する。

1978年 辻邦夫作「樹の声海の声」が「朝日ジャーナル」に連載され、その挿画を150回にわたり制作する。

1986年 「唐宋・山水画十選」を「日本経済新聞」に連載する。

1987年 「宋・動物画十選」を「日本経済新聞」に連載する。

1998年 鎌倉・建長寺法堂の天井画《雲龍図》の制作を開始。

1999年 浄土宗大本山増上寺・光摂殿の天井絵《泰山木》制作

2000年 4月、建長寺法堂の天井画《雲龍図》、完成

7月、京都・建仁寺の天井画《双龍図》の制作を開始

2001年 4月、初の回顧展「ひとり歩き その軌跡—小泉淳作」展が東京ステーションギャラリーで開催される。

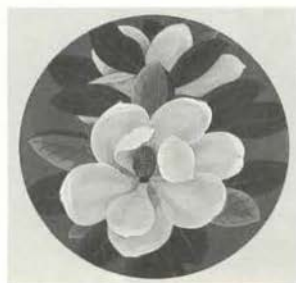
10月、建仁寺法堂の天井画《双龍図》、完成

著書 『アトリエからの眺め』(築地書館)1988年

『アトリエの窓から』(講談社)1998年

画集 『小泉淳作画集』(救龍堂)1990年

『小泉淳作作品集』(講談社)2002年



増上寺天井絵「泰山木」

花々

心象書道

永井健策

4月号は「花々」です。

花々なんてあまりにも一般的すぎる言葉かも知れません。

しかし、私にとって生きているということが、こんなにも素晴らしいことと感じている今、どうしても花々という言葉を書きたくなりました。

花という字を本当の花のように書く。

花だからこそ、花のように書く。

すると文字なのに、絵となって来ると感じませんか。

(ながい けんさく)

昭和20年群馬県生まれ。中央大学法学部卒業後、読売広告社に入社。企画セクションに配属され16年在籍した後、自動販売機製造メーカーのサンデンに転職。販売企画の仕事で16年続け、平成11年に独立。会社を設立し、新規事業に取り組んでいる。趣味で始めた「心象書道」が趣味の世界を超え、展覧会を開くまでになっている。

寺院紀行

東京・芝

廣度院

撮影／タカオカ邦彦

文／真山 剛



御忌教書伝達式後の祝宴で、三人の唱導師を代表して挨拶する峰島住職

平成十五年一月二十五日、浄土宗大本山増上寺の光摂殿大広間で祝宴が開かれた。

格天井の当代の画家百人による花鳥風月の天井絵と色鮮やかな襖絵にふさわしい宴席で、平成十五年の増上寺御忌唱導師の教書伝達式を受けての祝宴だった。

開宴からの挨拶の最後に、三人の唱導師を代表して峰島旭雄上人が挨拶に立たれた。浄土宗を開宗された法然上人の徳を鑽えるこの年忌法要で、大僧正に代わって唱導師という大役を勤めさせていただく御礼を代表として述べられた後、私事ですぐと断つてから、こう述べられた。

「本来ならばこうした任にはないものの、増上寺の門前寺院の住職であると同時に大学教授を長い間勤め、なかなかお手伝いできなかったことも含め、今回この大役を勤めさせていただく所存でございます。」

峰島上人が住職を務めるお寺は増上寺の三門のすぐ前にある。三門を背にして参道左手の一番手前、最近登録文化財になった山門と塀を残す名刹で、その名を廣度院という。

お寺には山号、院号、寺号があることはこの連載でも何回か書いたが、この廣度院は三縁山廣度院を正式名称とし、増上寺の塔頭寺院約三十の中でもっとも増上寺と縁が深く、そしてもっとも歴史の



廣度院は山号を三縁山といい、山号、院号が増上寺と同じ特別な寺院だ

ある名利である。峰島住職の挨拶の意味することは後に述べるとして、この名利の由緒に触れておこう。

廣度院はもと光明寺と称した真言宗の寺院で、その開創の年代は定かではない。だが、浄土宗の第八祖であり増上寺の開山である西譽聖聰上人によって、明徳四（一三九三）年に浄土宗寺院に改宗されたことをうけ、浄土宗寺院としての廣度院の開山とし、それからの寺歴だけで六百年を越える古刹であり、それ以前の歴史を考え合わせると、まさに古刹中の古刹という寺院である。

そして、同じ時聖聰上人によって真言宗から改宗されたのが増上寺で、廣度院は上人の書閣、念仏修行、退休の別場という役割を果たしたのである。前述した塔頭寺院とは「たっちゅう」と読むのだが、大寺院の境内にある寺院のことをいい、こうした役割を果たす特別な寺院のことをさすのである。

増上寺と廣度院は徳川家康が江戸に入ってから、現在地に移転したが、現在は二十九か寺と減ったものの当時は五十近くあった塔頭寺院の中で廣度院はもっともいい場所に立てられ、しかも増上寺と同じ山号、院号を持つ、塔頭寺院の中でも特別な寺院なのである。

さて、廣度院をはじめとする塔頭寺院だが、かつては増上寺の法要を受け持ったり、増上寺に集まる学生の寮であったり、また徳川家の位牌を安置するお霊屋を管理するといった役割を担い、増上寺、



練堀とともに登録有形文化財に指定された山門。戦争の戦火をまぬがれたこの山門に焼けトタンで囲いを作り、終戦後の一時しのぎの生活をしたという



境内に建てられた登録有形文化財の碑。指定された練堀は往時を忍ばせている

あるいは徳川家の庇護のもとにあったという。しかし、いまでは山内寺院という言い方はするものの、宗教法人としても独立した寺院になり、個々の寺院が個々の寺院なりに運営しているという。

こうした成り立ちから一般的な寺院とは少し異なる点がある。それは檀家を持たなかったり、あるいは檀家を持つてもわずかだということである。そして廣度院もそのような寺院の一つなのである。

では、どうして寺院を運営していくか？ 公務員、企業勤務、先生というように僧侶以外の仕事を持つている住職が多い。二足の草鞋を履いている住職には何度かお会いしているが、廣度院をはじめとする山内寺院はお寺の収入だけでは成り立たないということだ。廣度院もその例外ではない。

峰島住職は昭和二年に東京で生まれた。広島福山から上京、廣度院第二十三世住職の伯父、別所亮洲の養子に入った、父であり先代住職である峰島洲旭第二十四世住職が、鎌倉光明寺の塔頭千手院に療養中の時だった。

その父である先代は大正時代から、浄土宗の僧侶養成所を源とする芝学園でしばらく国語を教えた後に幹事となった。教師から経営の立場となった先代は、学校の財務はもちろん、当時の名校長であり、仏教学の碩学、かつ日本の社会事業の草分け的功労者でもある渡辺海旭先生の個人の財布も預かったほど信頼されていた。渡辺先



地藏尊が彫られた三界萬靈の石碑。
元文と明和という千七百年代の元号
が刻まれている

生は生涯を独身で通し、今も芝学園で一月二十五日に行われる御忌法要の後に浄土宗僧侶の子息である生徒が墓参りを欠かさない恩師であり、それこそ女房役を務めた父親の背中は印象深いものだったという。

だが、その父は終戦直後に昭和二十一年一月に病気で遷化された。峰島住職が旧制中学である芝中から旧制高校である山形高校へ進んでいた時だった。住職不在とはいかない。峰島住職は山形高校を退学、旧制の大正大学予科へ移った。そして、家庭教師をしながら、僧侶の資格のための修行と学問に励み、昭和二十四年には第二十五世として廣度院住職に就任したのである。

とはいえ、先に述べたように、塔頭という特殊な寺院である。現在には口絵の写真的ようにビルに囲まれた墓地で、檀家数が増えることもなく、檀家さんだけでは寺院の経営が十分にはいかないのが実状だ。そうした中、たまたま学問が好きで、結局は大学の教授も兼ねることになるのである。

峰島住職のエピソードの一つに次のような言葉がある。

「峰島の前に峰島なし。峰島の後に峰島なし」

芝中時代の優秀さを伝える言葉である。最終的には哲学という学問の道歩くことになるが、もともと哲学青年というより、語学が大好きだったという。芝中では英語を基礎的にマスターした。



母校でもある芝学園の理事長を務める峰島住職。一月二十五日の宗祖法然上人の大宗祖日には、全校生徒が集まり、理事長が導師となり法要が行われる



これがその後アメリカで交換教授として英語で仏教を教える際に非常に役立った。そして芝中を優秀な成績で四年で修了、旧制山形高校に進んだ。それは、母が米沢の浄土宗寺院の生まれで、伯父や従兄が山形高校の出身、あるいは在学中だったのが理由である。

また伯父にドイツ語の先生がいたこともあって、高校ではドイツ語を修得した。しかし、終戦の翌年に先代が急逝、高校を退学し東京、廣度院を継ぐために大正大学の旧制予科に入り直すことになる。その予科を終え、学部では西洋哲学を学んだ。しかし、修士課程を終えたもののその先の博士課程が大正大学になかった。スタッフがそろわないというのが理由だが、何もこれは大正大学に限らず、当時は東大や京大にも博士課程がなく、あるのは私立の早大と慶大だけだったという。

そこで選んだのが早大だが、それには当時大正大学に講師として来ていた先生が早稲田で教えられていたという理由がある。学問の世界では師となる先生の一言が大きな影響を与える。峰島住職もその専門にあたっては多くの師の導きによるところが大きかったのはいうまでもない。

こうして早大で博士課程を終えた峰島住職は、講師、助教授そして教授となり、早稲田大学ばかりでなく、母校大正大学を中心に教鞭を取り続けてきた。四十代ぐらいまではとにかく学問が面白くて、



毎年一月に開かれる峰友会新年会。大学の関係者など二百人近い友人知人が集まる。記念撮影では孫の法蓮君と一緒に

何よりも本を読み勉強していたかったというほどだが、確かにその間に書かれた論文は枚挙にいとまがない。と同時に、西洋哲学を中心に研究されたとはいえ、法然上人や浄土教に関する論文も若い頃から書かれている。また、塔頭寺院という事情から大学で四十二年間も教鞭を取り続けながらも、墓参に訪れる檀家の人たちに啓発されたり、後姿に教えられることが多かったという。

そして、平成十年、早稲田と大正大学を定年退職、学者の道に区切りがついた。とはいえ、これでお役御免とはいかない。文京女子大学に教授として招聘されるほか、浄土宗関係の仕事に就かれることになる。芝学園の理事長、浄土宗の教学院副理事長などをはじめ、宗門の役職があつという間に肩書きに連なる。

こうした中で今回の御忌法要の唱導師を勤める、どちらかといえば学者としての道に長居をした、そんな思いが冒頭の挨拶になっているのである。

廣度院は昭和二十九年に総杉の本堂を建立、現在も杉の香のする日本建築の良さ、木造の良さを満喫できる。一方、老朽化した庫裏を平成十年に建て直したが、その庫裏で勉強会が頻繁に行われている。三つの会にお邪魔したが、どれも真剣でしかも楽しそうな会だった。早稲田大学や大正大学時代からのもので、二十年、三十年と続いているそうだ。これは峰島先生の学者としての魅力だけでなく、



墓地の入り口にある廣度院住職の歴代墓。先代も芝学園で渡辺海旭校長のもと、事務局をあずかっていた

人柄の良さも物語っている。

何冊かの本をいただいたが、オープンカレッジや勉強会のメンバーからの寄稿の記念誌で、会員の会に寄せる想いが伝わってくる。本といえば、今回の御忌法要には多くの関係者が集まられる。廣度院住職としての関係者、そして学者としての関係者だが、そうした方々への引き出物にも本が何冊も入る。雑誌で連載した浄土宗門主や現増上寺法主、そして仏教学の大家中村元先生の長女との対談抜粋など。また、今回のために広く呼びかけて、なんと百四十人から寄せられた記念エッセイ集には、小、中学時代の同級生から勉強会の仲間まで、住職自身も忘れていたエピソードが盛りだくさんで、まさに住職の七十有余年の結晶という一冊になるだろう。

いつも掛けている眼鏡をはずされ目を細めた笑顔で、インタビューの最後にこうおっしゃった。

「お寺の方々、宗門や大正大学関係、皆さんが本当に優しく迎えてくれるのです。長い間外まわりをしていたのに、ありがたいことです。」

浄土宗の宗祖、法然上人。その徳を忍び讀めるこの法要にどんな想いを持たれて峰島住職がのぞまれるのか。学者としてとか僧侶としてとかというこだわりもなく、ただただ、法然上人への報恩謝徳の念で胸をいっぱいになれ、増上寺の本尊、阿弥陀様に向かわれるのではないだろうか。

(ルポライター)



勉強会での住職は本当に勉強を楽しんでいる様子だ

新連載

会いたい人
関 容子

① 渡辺えり子



撮影／タカオカ邦彦

えり子さんに初めて会ったのは、名優中村勘三郎の歌舞伎座の楽屋だった。あれは中村屋が亡くなる前年だったから、昭和六十二年のことだ。えり子さんは当時テレビドラマ、『バラ色の人生』で共演した勘九郎と急速に親しくなった。前衛劇の女優と梨園の御曹司とは、あまりにかけ離れた世界にいたが、お互いの人柄と才能はすぐにわかったし、同い年ではあるし、それに何と言っても気が合ったのだろう。

その日も、勘九郎との縁で歌舞伎を観るようになったえり子さんが、勘三郎の『うかれ坊主』に感激して、その楽屋を訪ね、喜んだ中村屋は居合わせた私と三人で帝国ホテルに出かけ、お寿司を御馳走してくれた。

「だってあの『うかれ坊主』を観て、日本舞踊への偏見が取れたんですもの。テレビで見てた日本舞踊は難解で静かで退屈に思えたのが、本当はこんな面白いものだったのか、と。心情が見事に分かったのです。お寿司屋に行

ったら勘九郎は今理屈で頭が一杯だけど、わたしも昔そうだったから今にわかるよ、とか、猿之助さんや幸四郎さんの新しい試みに対しても理解があつて、素敵な人だなという印象でしたね」

そのころ既に、女優、劇作家、演出家、「劇団300」の主宰、と四つの顔を持つて活躍していたえり子さんの芝居を、私はすぐに観に行った。『オールド・リフレイン』というその芝居は、現実と時空を越えた幻想の入り混じる独自の世界で、何とも不思議なノスタルジックな魅力があつた。

中村屋がその芝居を見損なつたのを残念がり、「何とかここでできないかね」と、小日向のお宅の稽古舞台を指さして、えり子さんに迫る場面にも私は居合せたのだった。

その後のえり子さんは『ゲゲゲのゲ・逢魔が時に揺れるブランコ』で岸田戯曲賞、『暎の女・まだ見ぬ海からの手紙』で紀伊国屋演劇賞、NHKニューウェーブドラマ『音・静

かの海に眠れ』の脚本でブラハ国際テレビ祭
グランプリ、そして映画『Shall we
ダンス?』で日本アカデミー賞助演女優賞
などを受賞している。

この天賦の才とエネルギーに満ちたえり子
さんは、いったいどんな少女時代を送ったの
だろう。

「わりと神経過敏で感じやすい子供だったん
ですよ。生まれたのは山形県山形市字村木沢
大字山王、三十世帯、百人しか住んでない村
です。父がもつと雪深い村の教員で単身赴任
だったので母は実家で私を生みました。

父は悪戸あくどという珍しい名前の村の生まれ
ですが、母は東京生まれ。母の母が明治天皇
の近衛兵だった人に見初められて、東京に
出たからなんです。美男で恰好のいいその
お祖父さんが、親戚の法事で山形へ来たとき
に、十五、六だった華奢で美人のお祖母さん
にひとめ惚れしたんですって。祖父は十いく



32歳(1987年)「顔の女」紀伊国屋演劇賞受賞式

つも年上で、奥さんの羨けを全部して、言葉も標準語に直して、子供が三人生まれたころに結核で亡くなってしまうんです。それで祖母は山形へ帰ってきて、お裁縫の先生をしながら、母と伯母と叔父とを、女手一つで育てたんですね」

そしてえり子さんの母もまた、ひと目惚れされて結婚した。短大を出て農協に勤めていたころのことだった。

「父は働きながら大学に通っていて、その図書館から本を借りてきては、これ読んだら？　って窓口にいる母に毎日アタックしてたそうです。母の叔父がボヘミアン・信というペンネームで劇作家をしていたこともあったそうで『人形の家』とか『三人姉妹』とか戯曲の本をかなり持ってたんで、母を通じて貸してもらう代りに、図書館の『宮本武蔵』なんかを母に貸してたらしいです。でも母はまだ若かったし、恋愛に興味もなくて、結局八年くらいつきあって、やっと結婚したそうです」

えり子さんの父も、その父親を結核で早く亡くしていて、やはり母の女手一つで育てられた人だった。

「つまり父も母も母子家庭で育ってるんで、女が屋根直しから畑から男の仕事を総てするのを小さいときから見てたので、女だからこうしちゃダメ、みたいなことはいっさい言いませんでした。それで私が演劇を志す道が自然に開けて行ったんでしょね」

読書好きの両親やまだ五十前の若い祖母が声に出して読んでくれる絵本や童話や民話、宮沢賢治や高村光太郎の詩は、えり子さんのリズム感を育てた。

「祖母や母が『桃太郎』の絵本を読んでくれると、鬼退治して帰ってきて、終りだ、って言うんですよ。でも桃太郎が生きてる限り、終りってないと思うんですよ。鬼や犬猿雉子はその後どうなったのか、って続きを考える癖ができました。

あるとき父が賢治の『ペンネンネンネン

小学校の頃



中学一年生で作・演出・主演した「帰ってきた転校生」



二十歳の頃、舞芸専修科時代。中段右

ン・ネネムの伝記』を読んでくれて……折れたクラレの花がブルブルとゆれました、つてところで終りだ、つて言うんです。そんなの終つてない、と言うと、作者が未完のまま死んじゃったから永遠にわかんないんだ、つてそれを聞いたとき、まだ四つくらいでしたけど鳥肌が立ちましたね。物語にはそれを創る人がいてその人が死んでも残るんだけど、未完の部分は永遠にわからない……というのが怖くて怖くて、気の遠くなる思いをしたんです。死ぬことも怖くて、山王は夜になるとますます暗で、これが死後の世界かと思うわけです。人間はどうせ死ぬのに、なぜ私を生んだのか、つて母親を問い詰めるような子になっちゃつて（笑）、でも母は、大人になればわかるから、何にも怖くなくなるから、つて説得してくれました」

えり子さんが五つのころ、一家は山王からもう少し開けた町に移り、やがて山形第六小

学校に入学する。出羽山地の山あいの村だが、夜になると遠くに山形市内のネオンが見えた。「父は月に一回しか戻つてこないんですけど、夜、ネオンがすごくきれいなんで、あそこが東京か、つて訊いたんです。いや、東京はあれよりもっと大きくて、ずっと遠いんだ、つて父が言うんです。戦後の人つてみんな東京にあこがれてましたね。日本は復興するためにまず東京を発展させて外国と肩を並べさせようとしたから、村の男たちを東京に吸収したんですよね。戦争中はまず東北の農家の倅から兵隊に取つて、一番危険な最前線に送つてるんですよ。それで年寄りや女子供しか残つてないところに東京の政府は米を送れと言つてきて、みんなは寝ないで働いてお米作つて、都会に送つてたんですよ。これ、案外知られてないのよ、東北の人は口が重いからでも資料にちゃんと残ってる。山林の木も全部伐採されて供出させられて、平たくなった地面にサツマイモ作らされて、景観も変つて、

東北地方の人たちは日本の国に一番傷めつけられて……あれ？ 何の話をしてたのかな

(笑)

えり子さんによれば、東京がユートピアだという感覚は、当時の国家政策によってもたらされたものだという。

「そういう価値観の中で当時は生きてきて、父も教員の研修会でときどき上京してましたから、その度にミルク飲み人形とか、美術館でロダンの『考える人』の絵ハガキとか買ってきてくれるわけなんです。東京にはこういう文化があるんだな、とずうーっと思ってる育ちましたね」

えり子さんが最初に観た映画は『赤い靴』。

二つのとき、山形の映画館で母に抱かれて観た。「そのときはさすがに飽きて、私が泣いたので途中で帰ってきたそうです。その後、物ごころついて観てみたら、モイラ・シエラーのバレリーナが赤い靴をはいて死ぬまで踊り続ける、その靴がぬげない、芸術家というの

はこういうものなんだ、というのが私の潜在意識に烙印押されたみたいになりました。この間、実家に帰ったときにたまたまBSテレビで放映されたので、久し振りに母親と並んで何度目かの『赤い靴』を観ましたけど、したら二つのときに観て記憶してるシーンを思い出しましたね。魔法使いがガーッと画面にアップで出てくる怖い場面でした」

そしてえり子さんが演劇人への道を歩き始めるのを決定づけるのが、高校一年のときに観た文学座公園『ガラスの動物園』だ。

「山形西校の演劇クラブの先輩と観に行って、繊細で神経症的なローラに自分を重ね合せて観て、芝居が終わったら感動のあまり号泣して椅子から立ち上がれなくなっちゃったんです。長岡輝子さんは母親のアマンダ役と演出でしたけど、外国の芝居に見えないくらい自然な演出でよかった。先輩が楽屋へ行こうと言って、リングか何か持って裏へ廻ったら、今舞台で熱演してた江守徹さんや高橋悦史さんがもう

普段の恰好になってはて（小道具）を片づけたり、竹箒でそこらを掃いたりしてて、ああ、これが演劇の世界なんだ、ってまたそこで感激しちゃいました」

長岡さんはローラ役の寺田路恵さんと一緒に部屋で、化粧を落としているところだった。「あのお、私は芝居をやりたいんですが、大学に進むか、すぐ上京するか迷ってるんです、と言うと、長岡さんがはつきりおっしゃるんです。役者に学歴は問題じゃないから、高校出たらすぐ上京なさいよ。私は岩手生まれだけど山形の子も訛りがあるだろうから、養成所に入ってまず言葉を直すといいわね。月謝も高くないですよ、って。それで私はその日に決意しちゃって、学校の勉強をするのをすぐやめたんです。すごい難しい進学校に五十番くらいの成績で入ったのに、出るときは終りから八番目くらい（笑）」

長岡輝子さんは近ごろずっとえり子さんの仕事に瞠目していて、昨年は『月夜の道化師』

とか『詩のしの詩』の舞台を観に、紀伊国屋ホールや本多劇場に出向き、ロビーで出会った私にこう語った。

「書くものも演出もみごとだし、女優としても面白いし、ああいう才能が花開くキッカケが私の芝居だなんて言ってくれて、私はとっても嬉しいわ」

（つづく）

一歳当時。
山形山村に生まれた



われとはげみて念仏申して、いそぎ極樂へまいりて、五通三明をさとりて、六道四生の衆生を利益し、父母師長の生所をたづねて、心のままに迎えとらんとするべきにて候なり。

（『往生淨土用心』）

自らお念仏に勵んで、死後は速やかに極樂淨土へ往生し、そこで五通や三明といった妙なる力を身につけて、再びこの娑婆世界に還り来て、迷いの世界を経巡っている人々にお念仏の教えを弘め、ご両親やお世話になった方々のいらっしやる場所を訪ねて、思うがままにお浄土にお迎えしようと思ふべきです。

父母のもとへ還相回向

消えし子よ 残せるサボテン 花咲けり

かく小さくも 生きよと願う

平成十四年九月十七日は、言葉では言い表すことのできない悲しみと憤りが私たちの国・日本を覆い尽くしました。北朝鮮に拉致された方々の内、八人の方がすでに亡くなっているとの報道がなされたのです。

その八人の中には、まだ十三歳・中学一年生で拉致された横田めぐみさんの名前も記されていました。会見でのめぐみさんのご両親の一言一言が胸に迫ってきました。拉致から二十五年、ご両親の思いはいかばかりであったことでしょう。思わず私は、かつて購入した一冊の本、めぐみさんの母、早紀江さんがまとめた『めぐみ、お母さんがきつと助けてあげる』（一九九九年十月・草思社）を手にしました。そこからは、親子の強い心の絆がひしひしと伝わってきます。その中に、めぐみさんの無事を願いながら詠まれた歌がいくつか紹介されていました。冒頭の歌もその一つです。めぐみさんが修学旅行のお土産に買ってきたサボテンの花が一輪咲いた時、めぐみさんの命とサボテンの花とを重ね合わせて詠まれた

歌です。どんな状況であっても、とにかく生きていて欲しいという切なる思いを汲み取らずにはいられません。ところが、北朝鮮による発表が正しければ、その理不尽な暴挙により、ご両親の切なる思いは届かなかったのかも知れません。

その後、なんとか帰国を果たされた曾我ひとみさんが、彼の地でのめぐみさんとの思い出を語ってくれました。手作りの押し花をいただいたこと、そして、監視の目がなくなり二人きりで就寝した夜、小学校で習った「もみじ」や「ふるさと」を日本語で歌ったことなどです。この曾我さんの会見を聞きながら、私の胸には、あらためて言いようのない悲しみがこみ上げてきました。

兔追いし かの山 小鮒釣りし かの川

夢はいまも めぐりて 忘れがたき 故郷

いかにいます 父母 つつがなしや 友がき

雨に風に つけても 思いいずる 故郷

こころざしを はたして いつの日にか 帰らん

山はあおき 故郷 水は清き 故郷

いったいめぐみさんは、どんな思いでこの「ふるさと」を歌われたことでしょうか。そして、遠い異郷の地から、わがふるさとと愛しいご両親をはじめとする大切な方々に向け、どれほどの切なる思いを胸に秘めながら力尽きた方が多くいたことでしょうか。私は、阿弥陀さまがそうした方たちの思いをお汲み取りいただくようにとお念仏を回向させていただきました。

ここで政治的なことを申し上げるつもりはありません。浄土宗僧侶としての私の思いのみを述べさせていただきます。そうした方たちのこの世での果たせぬ思いが叶えられる〈場〉こそ、法然上人がお示しになった阿弥陀さまのお浄土であり、そこでのかけがえのない大切なあの方との俱会一処の実現です。そのために上人は、お念仏を称えて必ずや浄土往生を遂げ、そこで心おきなく悟りを目指すべきことを訴えられました。否、すでに阿弥陀さまは多くの方からのお念仏の回向を受け止めて、その方たちの浄土往生を叶えてくださり、そして、冒頭のご法語のように、もうその方たちはわがふるさとに還り来て、かけがえのない大切な方々のことをあたたかく見守られているかも知れません。

（大正大学講師・林田康順）

「代替医療」ということばをめぐる

CAMUNet / 代替医療利用者ネットワーク

井上朝雄

「代替医療」ということばをご存じでしょうか？

このことばのアメリカ力のある定義を紹介すると、「医学学校で一般的には教えられておらず、病院では通常利用できない治療法」としています。『医学学校で教えられ、病院で受けられる治療法』とは、いわゆる近代西洋医学であり、それ以外の療法を引くくめて代替医療と呼んでいるわけです。

同じものをイギリスでは、「通常医療を補完する療法」という意味で「補完医療」と呼んでおり、それらを合わせた「補完代替医療」という呼び名もあります。

では、代替医療（本稿ではこの呼び名でいくことにします）にはどんな療法があるのかといいますと、わたし

たちに一番なじみがあるのは中国医学でしょう。鍼や灸、漢方薬などはいまでも信奉者が多く、そのよって立つ「気」や「経絡（けいらく）（気の通り道）」、「経穴（けいけつ）（いわゆるツボ）」などの理論は、中国の歴史には裏付けされていて、西洋医学の理論ではないし、西洋医学的に証明できない——何しろ、からだを開いてみても、経絡なんてないし、気も見えない——から代替医療ということになるのです。こうした伝統医療の代表的なものとしては、インド医学やチベット医学、ユナニ医学（アラビア系医学）などがあり、世界各地に残るシャーマニズムもそうです。

あるいは近代西洋医学に対抗して生まれた比較的新しい医学体系として、ホメオパシー、オステオパシー、カ

イロブラクティックなどがあり、そのほかボディワーク的なもの、サイコセラピー的なもの、エネルギー療法的なもの（たとえばイギリスのスピリチュアル・ヒーリングのような手かずし療法など）さまざまです。近年女性に人気のアロマテラピー（芳香療法）やリフレクソロジー（英国式足ツボマツサージ）ももちろん代替医療の範疇ですし、 $\times\times$ でガンが治った！¹ というような謳い文句のものからドラッグストアで気軽に買えるようなものまで百花繚乱のサプリメント（補助食品）もそうです。

D・アイゼンバーグ氏の「合衆国における代替医療」は、人々がどのように代替医療を利用しているのか、その実態を調査したのですが——その調査票の代替医療の項目には「Prayer（祈り）」というものでありました——その結果、何が判明したかというと、一九九〇年時点で国民の三人に一人が過去一年間に代替医療を利用しており、それに費やされた費用は一三七億ドルと、全入院経費に対して自費で支払われた金額の年間総額一二八億ドルを上回っていたことでした。こうした状況を反映して、アメリカでは政府機関のNIH（国立保健研究所）に代替医療研究室が創設され、いまや国立セン

ターへと昇格して、年間一億ドルという予算までついています。

一方、イギリスにおいてはチャールズ皇太子が中心となって代替医療（補完医療）の導入を推進しており、九七年には「総合医療財団」が設立されて皇太子が総裁に就任、通常医療と補完医療を統合させた「統合医療」の確立に向けて積極的に動いています。

アメリカにしろイギリスにしろ、国が代替医療の研究や導入に取り組み始めたのは、日本同様、国民医療費の増大という問題意識が大きいからです。しかし、それを動かしたのは、やはりわたしたち医療消費者としての市民が、代替医療が必要だと強く望んだからにはほかならないと思います。

註 「代替医療」とは英語のオルタナティブ・メディスン（Alternative Medicine）の直訳語。

イギリスにおける「通常医療を補完する療法＝補完医療」は（Complementary Medicine）と合わせて「補完代替医療」（Complementary & Alternative Medicine 略称 CAM）という呼び名もある。

民話
をたずねて

連載

石崎敬子

日本の
屁っぴり爺と
大明神



ISHI
KAWA

絵 石川忠夫

昔々、爺さまと婆さまがあつたつて。

ある日、爺さまがさあ、おはぎを持つて畑耕しに行つたつてねえ。それで、疲れたもんだから、畑に鋤を立てて休んでいたつて。そうしたら、どこからかきれいな小鳥が飛んできて、鋤の棒の上にちゃんと止まると、

あやちうちう こやちうちう にしきさらさら

ごようのさかずき おちやぴんちゃん ぷう

つていい声で鳴いたつてねえ。

「はあてなあ、おもしろい小鳥だなあ。婆さまにも見せてやりてえなあ。ようし、このおはぎをぶつつけてやんべえ」

つて、爺さまはおはぎの小豆だけを取つて食べてさあ、それでまあ、小鳥めがけてひよいと投げたつて。いい案配に小鳥にあたつてねえ、小鳥はころころつて落つちちたつてねえ。

「こりやまあ、おはぎだけでもいで、そうして持つてくべえ」

爺さまは小鳥からおはぎをもいで食べようとしたらねえ、ぺろつと小鳥ごと食べちゃったつて。さあさあ困つた、こりやどうしたら

いいべえかと腹のあたりを撫でると、腹ん中がもぐもぐして、へそからなにやら出てきたって。見るとそれは、小鳥の小さな足だったってねえ。

爺さまはさあ、小鳥の足を引っ張って、そこから抜こうとしたらねえ、急に尻がむずむずして、

あやちうちう こやちうちう にしきさらさら

ごようのさかずき おちやびんちゃん ぷう

って、尻が出たんだってねえ。

「こりやおもしろい。婆様にも聞かせてやろう」

爺さまは飛んで帰り、婆さまにも聞かせたって。

「まあ、おもしろい。こんな尻は、おら初めて聞いた。どうじやろう、お大尽さまにも聞かせてみねえか、なあ」

と、婆さまがあんまりすすめるもんで、次の日にさあ、爺さまはお大尽さまの屋敷へ行ったってねえ。

「日本一の尻っぴり爺が来ました」

「なに、日本一だと。そんならやらせてみるか」

ということになり、爺さまはお大尽さまの前に通されたつて。立派な敷物の上に座らせられた爺さまは、懷に手を入れ、へその足を引っ張つて、

あやちうちう こやちうちう にしきさらさら

ごようのさかずき おちやびんちゃん ぶう

つて、やったつて。

すると、お大尽さまは、

「こりや、なんと不思議な爺さまだなあ。日本一の屁つぴり爺じや」

つて、たいそう面白がり、爺さまにうんと褒美を持たせたつてねえ。

それでまあ、爺さまと婆さまは喜んでさあ、たくさんの褒美を目の前に並べて、ああだこうだと話したつてねえ。

そうしたら、隣の爺さまが聞きつけて来たつて。爺さまと婆さまがさあ、これこれしかじかと一部始終を話してやると、

「おらの爺さまはいつも大きな屁たれる。ようし、それじゃ、行かせねばなんねえ」

つて、慌てて帰つて行つたつて。

民話

をたずねて



そうして、爺さまをつかまえて、

「大きな屁して、隣よりたくさん褒美を貰ってこ。ただじゃあなんだから、そこいらの草でもうんとむしって食べて、腹うんとふくらかして行くとええ」

って、送り出したってねえ。

隣の爺さまは、言われたとおりにうんと草むしって食べてさあ、行っただって。

そうして、お大尽さまの屋敷に着くなり、

「屁っぴり大明神が来ました」

って、わめいたってねえ。

「なに、屁っぴり大明神だと。どんな屁か一つ聞かせてもらおう」というわけで、隣の爺さまはお大尽さまの前に通されたって。爺さまはさあ、ここぞとばかりに、うーんと息張ったって。

すると、

ぶうぶうびいびい　ぶうぶうびいびい　びびだびい

はれもうひとつ　びびだびい

って、変な音がしたって。ところが、あんまり息張ったもんだから、山ほど汚いものが出たってねえ。その臭いこと、あまりのことにお大尽さまは鼻をつまんで逃げ出してしまつて、隣の爺さまは男どもに叩かれるやら蹴られるやらで、体中血で真っ赤にして、わあーわあー、泣きながら帰っていったって。

そんなこととは知らず、隣の婆さまはさあ、まだかまだかと爺さまの帰りを待つていたって。そのうち、待ちきれずに屋根の上に登つて見ていたって。そうしたら、爺さまの姿が小さく見えてきたってねえ。

「こりやまあ、おらの爺さまは赤い着物を着て、歌いながら帰つてくるべえ。うんと褒美を貰つたにちがいない」

って、婆さまはたいそう喜んでさあ、屋根の上で踊つたって。それっきり。



FORUM

浄土の広場

「浄土の広場」では

読者の自由な参加をお待ちしています。

詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、

TVウォッチング、紀行文、その他創作等。

あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。

どしどし編集部にお寄せ下さい。

浄土誌上句会

〔特選〕

公園の親子と鳩に日脚伸ぶ

山本美代子

●公園

たむろする鳩の仲間に入ろうとする子供の
あとを、親がついて回っているなど、いろい
ろ自由に読みとればよいだろう。少し長くな
った日が、親子と鳩を明るく包んでいるのを
感じればよい。

〔佳作〕公園の冷気の通う石の道

日向ぼこ公園ベンチ賑わいぬ

清水 みね
谷 しげ子

公園のふらここ弾む冬ぬくし

石原 新

●筒

〔特選〕

封筒に入れし年玉母あてに

佐藤 まり

同居か別居か、それはどうでもよい。子供
たちに与えるのと別に、母への年玉を用意す
る。何か一筆添えるのかどうか。ともかくも

年寄りには、ちよつとしたことがうれしいものである。

〔佳作〕

経筒に活けし茶の花鮮やかに

金谷 友江

寒鯉の筒切り炊いて加餐とす

片桐てい女

筒抜けの噂ばなしや葛さくら

河井富美枝

●自由題

〔特選〕

雲ひとつなき冬、滝の男振り

中島富士子

四囲の木々は枯れて、岩肌は一層あらわになつてゐる。一直線に落ちる滝の姿は力強い。真青な空がそれを増幅する。男滝・女滝を思い出さずとも、この「男振り」は気持ちのよい表現である。

〔佳作〕

啓蟄や縫い目はころぶオムライス

野島 葵

石垣の日差し力に冬すみれ

島谷ときを

一駅を歩くと決めし四温かな

寺下 忠至



浄土誌上句会のお知らせ

題

①季語ではありません

大安

テープ

自由題

参加作品 編集部選

公園

公園のどんぐり手よりこぼれおり

公園の写生大会春つらら

冬日あび公園流る太極拳

公園の鞆夜は風の漕ぐ

公園に羽根つく音の親子かな

公園の草やはらく冬ぬくし

公園に人を待たせて霜日和

公園の砂けり上げし寒けいこ

公園の蘇鉄を守る冬囲い

筒

筒の先形変りて夢ガラス

今井 恵子

金谷 友江

嶋田喜代子

片桐てい女

中島富士子

河合富美枝

増田 信子

浜口 佳春

谷 しげ子

今井 恵子

花筒の水仙一輪けふの花

筒に入る卒業証書古りにけり

竹筒に水仙一花孫娘ははたら

竹筒のともし灯火悲し地震神戸

竹筒に古き名のある貯金箱

竹の筒羊羹ボンと冬の雷

春風の筒抜けの家魚煮る

手を筒に吸き込む指の熱かりし

青竹の筒より落ちる冬の水

自由題

おでん屋の少し染みつゝ割烹着

足跡を振り返り踏む霜柱

ゆつくりと押す車椅子梅の園

冬波を来て接岸に力抜く

降り立ちしホームの湿り冬の雨

風止んでふらふら落つる奴風

歌を遠う風を力に麦芽ぐむ

地ひびきや凍てし路地掘る鉄の爪

母の墓日があたためたため梅三分

背を泥に埋め静もる寒の鯉

冬帽もまじりて長き葬の列

日は島をのこして沈む花菜風

冬耕や上衣ふわりと畦に置く

嶋田喜代子

清水 みね

山本美代子

中島 一子

石原 新

山口 信子

井村 善也

増田 信子

谷 しげ子

中村よみ子

村上 青女

北川 弘子

島谷ときを

小林 恵美

坂倉左武朗

蘭田 郁子

三ツ橋仁平

北川 弘子

坂倉左武朗

西井 正

池田 伊吹

大西 明子

締切・四月二十日
発表・『浄土』二〇〇三年六月号
選者・増田河郎子（『南風』主宰）
応募方法
●いずれの題とも数の制限はありません。
●特選各1名・佳作各3名
●葉書に俳句（何句でも可）と、住所・氏名を必ずお書き下さい。
宛先
〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館内
月刊『浄土』誌上句会係

俳

文
一回斎放念

諧

画
陀羅尼禿頭

噺

井原西鶴は「好色一代男」などの散文によってむしろ有名だが、あれは実は片手間仕事、ほんのふざけ半分に書いたものである。

本当の西鶴は根っからの俳人。

矢数俳句、大矢数などと称して、

一晚に何千句も独吟するという

離れ技に何度も挑戦した。

脇座十二人、執筆八人、五役を置き、

医師、立合いの役人まで待機して

スタッフだけで五十五人。

その他、俳諧師七百人、聴衆千人。

空前絶後のステージで成し遂げた。

その後、記録が破られたと聞くと、

今度は一日一夜、二万三千五百句に成功。

まさしくデス・マッチ。

こんなに頑張ったのに、

いま人口に膾炙される句は僅か。

同時代の芭蕉にはるか及ばず、

遊びで書いた草子は次々にベストセラーになるも

唇を噛み締める人生であった。



編集後記

冷たさに唇かみしむ春の雨 岱潤

ある本でこんなリストを見つけた。

中国（一九四六、五〇～五二）

韓国・朝鮮（一九五〇～五二）

グアテマラ（一九五四、六七～六九）

インドネシア（一九五八）

キューバ（一九五九～六〇）

ベルギー領コンゴ（一九六四）

ペルー（一九六五）

ラオス（一九六四～七二）

ベトナム（一九六一～七二）

カンボジア（一九六九～七〇）

グレナダ（一九八三）

リビア（一九八六）

エルサルバドル（一九八〇年代）

ニカラグア（一九八〇年代）

パナマ（一九八九）

イラク（一九九一～九九）

ソマリア（一九九三）

ボスニア（一九九五）

スーダン（一九九八）

ユーゴスラビア（一九九九）

アフガニスタン（二〇〇一～〇二）

これは今、イラクに自由をと言って攻撃を続けている国が、第二次世界大戦後戦争状態になった国、もしくは爆撃した国のリストである。

我々は自由を愛する平和的な国家だと演説した大統領の言葉が、虚しく聞こえてならない。

我々は少なくとも政治的な視点ではなく、命を見つめる宗教者としての目でこれからも見てゆく必要がある。（長

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川岱潤
斎藤晃道
村田洋一
佐山哲郎

編集顧問

大室了悟

浄土

六十九巻四月号 頒価六百円

年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 平成十五年三月二十日

発行 平成十五年四月一日

発行人 真野龍海

編集人 佐藤良純

印刷所 株式会社 シーティーイー

〒一〇五・〇〇一一

東京港区芝公園四・七 四明興会館内

発行所 法然上人鑽仰会

電話 〇三三・五七八 六九四七

FAX 〇三三・五七八 七〇三六

振替 〇〇一八・八・八二八七

ホームページ <http://www.jodo.ne.jp>

大正大学オープンカレッジのごあんない

大正大学では、社会人を対象とした講座を巣鴨キャンパスで実施しています。また、本年度から浜松町サテライト教室におきまして都市型の各種セミナーを開催いたします。

これらは、大学の企画したものを株式会社ティー・マップが実施と運営を担当いたします。

特に、宗門向けセミナーは遠方の皆様にも1日あるいは1回参加が可能となるように、内容上の工夫をいたしますので、ご期待ください。

〈5月からの開講分〉

浜松町サテライト校舎:みとらセミナー

大正雅美の「10才若返る美人色発見講座」
大正雅美の「色彩検定2/3級受験対策講座」
高嶋秀武の「簡単に身につくおしゃべりのコツ」
名僧に聴く「般若心経の世界」
貞廣邦彦の「実践・手話講座」
養老孟司の「人間学」
鈴木健次が聞く「作家—自作を語る」
毎日書道展会員9名書道カレッジ:実用から
創作・篆刻まで
宗門向けセミナー(下表参照)



巣鴨校舎

仏教リレー講座「仏の心を読む」
赤平泰処の「書道に親しむ」
染川英輔の「仏画に親しむ」
貞廣邦彦の「手話表現力向上講座」
守山祐弘の「てんこく」
岩田昂の「作家を語る—作家と出版社」
米山孝子の「今昔物語の世界」
多田孝文の「維摩経のこころ」
ひろさちやの「般若心経に学ぶ人生の智慧」
野末陳平の「漢詩の旅」
作家・津島佑子の「私の本棚」



宗門向けセミナー

講座名	回数	講座名	回数
カウンセリングの実際と基礎技法	月1回 計8回	寺庭向け教養講座	月1~2回 計20回
パソコンビギナー講座	月2回 計10回	僧侶のためのリレー研究会 —仏教とお寺の現代的課題を考える—	月2回 計20回
PC応用研究会 —寺院管理から教化活用まで—	月1回 計8回	教化のための実用書道基礎講座	月2回 計20回
実践教授・トークコミュニケーション	月2回 計10回	各宗名僧・高僧に聴く	月1回 計6回

・詳細パンフレットご希望の方にお送りいたします。☎0120-721-310

法然上人鑽仰会の



『念仏讀本』完全復刻版
1,600円



『差出人は法然さん』
600円

月刊『浄土』
バックナンバー



選擇集十六章之図(額入り)
「選擇集絵解き物語」含む
20,000円



「法然上人絵伝絵書」
(8枚セット)800円



委託販売

増補版『浄土への道
法然上人法話抄』
1,000円



『ブッダ
知れば知るほど』
1,000円



※浄土宗大本山増上寺蔵
「法然上人絵伝・残欠二巻本」より

当会発行の書籍、雑誌のお求めは、
当会へお申し込みください。なお、月
刊『浄土』を除き価格に送料は含まれ
ておりません。別途実費を申し受けます。

法然上人鑽仰会

電話 / 03-3578-6947

FAX / 03-3578-7036